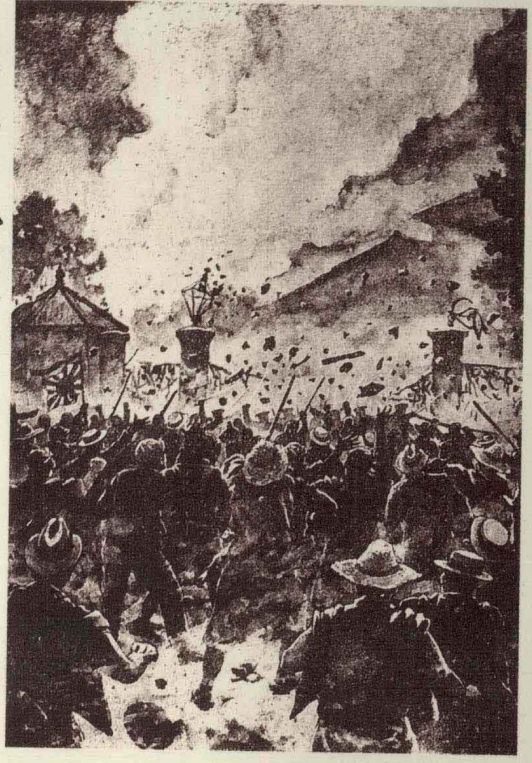
20世紀の日本 12

群衆

機械のなかの難民



松山 巖

読売新聞社

群衆

機械のなかの難民

松山　巖

20世紀の日本 12

編集委員
北岡伸一
猪木武徳
御厨　貴

読売新聞社

著者紹介

松山　巖（まつやま　いわお）

1945年、東京生まれ。作家、評論家。70年、東京芸術大学美術学部建築科卒。

著書　『乱歩と東京』（日本推理作家協会賞評論部門賞、ちくま学芸文庫）、『世紀末の一年』（朝日新聞社）、『うわさの遠近法』（サントリー学芸賞、青土社）、『都市という廃墟』（ちくま文庫）、『百年の棲家』（ちくま学芸文庫）、『肌寒き島国』（朝日新聞社）、『闇のなかの石』（伊藤整文学賞、文藝春秋）など。

20世紀の日本12

群衆――機械のなかの難民

一九九六年（平成八年）十月十四日　第一刷

著　者　松山　巖

編集人　梅田康夫

発行人　伏見　勝

発行所　読売新聞社

東京都千代田区大手町一―七―一　〒100―55

大阪市北区野崎町五―九　〒530

北九州市小倉北区明和町一―一一　〒802―71

名古屋市中区栄一―一七―六　〒460―70

印刷所　凸版印刷株式会社

製本所　大口製本印刷株式会社

●落丁・乱丁の場合は、お取り換えいたします。

●定価はカバーに表示してあります。

©1996, MATSUYAMA Iwao　Printed in Japan

群衆　機械のなかの難民

◉目次

第一章　二十世紀の群衆の貌――7
第二章　「坊っちゃん」たちの怒り――31
1　日比谷焼き打ち事件――31
2　根なし草の群れ――電車賃値上げ反対運動のさ中に――57
第三章　性急な人々――76
1　大戦場・東京の失敗者たち――76
2　鶴嘴を打つ群れ――凱旋門としての東京駅――104
第四章　機械人の群れ――132
1　民衆の発見――米騒動――132
2　米騒動前夜――成り金時代の諸相――150
3　米騒動、その後――一人と千三百人――171
第五章　狂える歯車――202
1　新しい大都市の貌――関東大震災後の東京人――202
2　精神病棟のなかの群れ――『ドグラ・マグラ』の世界――219

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

3　自己喪失者の群れ——240
4　家の喪失——子殺しの時代——260
第六章　消耗品の群れ——281
1　総動員体制——281
2　戦争という人体実験——304
3　奇蹟を待つ群れ——戦時統制の戦後への流れ——319
第七章　磨滅する群れ——337
1　群衆社会の成立——高度成長へ向けて——337
2　機械のなかの難民——361
第八章　ノリのような建築のなかで——380
あとがき——405
参考文献——410
人名索引——414

装丁　熊谷博人
カバー写真　『戦時画報』
明治38年9月18日号より

JASRAC　出9667011－601

群衆

機械のなかの難民

第一章　二十世紀の群衆の貌

これから群衆についてだらだらと述べる。人間の群れはいつの世にも存在する。群衆もまたいつの時代にも登場したであろう。しかし群衆は単に人間の群れを指すわけではない。群衆は一体となった感情を有している。ときには怒り、苛立ち、ときには哀しみ、泣き叫ぶ。ときには大いに笑い、喜びを発散する。

群衆は一個の人間を超えたなにかに衝き動かされ、一つとなった表情をもつ。それゆえに、人は群衆のなかに巻き込まれ、共感し、逆に嫌悪し、怖れ、遠ざかろうとする。つまり群衆を成立させる要因はそれぞれの時代によって異なり、群衆を外から眺める視線もまた時代によって変わるはずである。

主題は二十世紀の日本である。群衆という現象を時代を超えて考えるよりも、二十世紀という時間の枠と、日本という場所の枠のなかとで考える。具体的にいえば、群衆がひき起こした事件や事象、群衆を眺めた文章を手がかりにせざるを得ない。

まず、二十世紀とそれ以前の時代との群衆の違いを記述しなければならない。世紀があらたまっ

たからといって、人々の姿や形ががらりと変わるわけでもない。しかし、日本という国は不思議なくらい、十九世紀と二十世紀との間に大きな変化が認められる。

二十世紀の初頭の群衆について、三人の文章を引用しながら考えてみる。

一九〇二年（明治35）、横山天涯こと源之助は、明治になって起きた暴動について時代を三つに区切って、整理している。

> 暴動時期に区画あり、西南戦争を以て第一期の局終とし自由民権の論起りしより保安条例発布に至る迄を第二期とし、爾来今日の如きは第三時期に在るものか、鉱毒地の農民嘯集して大挙東京に出でんとするが如きは、後世よりは第三時期の中に於て、注目すへき一ツに数へとるべし、此中最も我れ等に趣味を与ふるは、自由民権論の勃興したる第二期なるべし。但し自由党の組織せられたる当時よりは、国民政党に倦み、有志奔命に疲れて各種の政党解散したる時より、保安条例発布、国会開会せられたる表面最も沈静なりし間に、詩人の注目すべき幾多の秘密運動行はれたるがごとし。（「春風閑話」『新小説』明治三十五年五月号）

この短文のなかにある保安条例の発布は一八八七年（明治20）十二月である。

明治十年代に盛んだった自由民権運動は十年代末に一旦は落ち着く。ところがこの年、井上馨の外交案、つまり幕末に締結した不平等条約を全面的に改正するのではなく欧米諸国と妥協しながら改正しようとしたことをめぐり、再び民権運動は燃え上がる。この動きを怖れた政府は、横山のいう通り、保安条例を公布し、尾崎行雄、中江兆民、星亨、片岡健吉ら主だった者五百七十名を東京

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

から追放した。

政府の意向に反する者を、いってみれば所払いに処したわけである。乱暴な方法だが、こんな法のまかり通ったところが十九世紀の日本である。横山は、保安条例と国会開設（一八九〇）によって終息してしまった暴動の第二期、すなわち自由民権運動が盛んだった時代を懐かしんでいる。この短文の後に、当時起きたさまざまな事象を回顧している。

じつはここに十九世紀と二十世紀の相違点が浮上している。横山は政府と対立する在野の勢力があったことをもはや懐かしんでいる。過去のことである。すでに民権運動を指導した有力メンバーの大半は国会議員となっている。一九〇〇年（明治33）に第四次伊藤博文内閣の成立をみるが、ここには星亨らかつての民権運動家が入閣している。

二年前の一八九八年には大隈重信を首相に、板垣退助を内相とする、はじめての政党内閣が誕生している。議会政治が開始されたともいえるが、見方を変えれば批判勢力もまた政治体制のなかに政治家としてすっぽり組み込まれたのである。実際、大隈と板垣の組閣の際には、民権運動家たちはこぞって猟官運動を行っている。大物も小物も政治上の権力を得ようと躍起になった。星らは議員としての地位を利用して、さまざまな汚職を公然と行い、話題を提供していた。

だからこそ、横山は民権運動の時代を回顧している。

では二十世紀の日本はどのような状況下にあったのか。それを端的に表しているのが、横山のいう第三期の「鉱毒地の農民嘯集して大挙東京に出でん」とした事件だ。

一九〇〇年二月、群馬県下の渡良瀬村、吾妻村、谷中村などの農民およそ二千五百名は足尾銅山の鉱毒被害を訴えるために東京へ押し出した。彼らの行動は群馬県佐貫村川俣で待機していた三百

名の警官により徹底的に鎮圧された。十九世紀最後の年に起きた、この川俣事件は二十世紀の群衆の姿をはっきりと予告していた。横山のいう通り「後世よりは」「注目すべき」事件となった。

なぜなら、まず田中正造という稀有な政治家による渾身の支援と多くの人々の共感があったとはいえ、政治的にはまったく無力にすぎぬ人々が自ら立ち上がった運動であった。村の有力者でさえ支えにならなかった。彼らは銅山開発側についたからである。しかも鉱毒により田畑は枯れ、魚介類も死に絶え生計が立たぬというギリギリの抗議でさえ政府は無視し、川俣事件では六十八名が予審送りとなり、うち二十三名が重罪公判にかけられている。

足尾銅山事件は今日でいう公害事件である。が、あらためて公害事件として注目され、また一般に知られるようになったのは一九七〇年代に反公害運動が全国で起きてからである。七十年という長い年月の間、この事件は忘却されてきた。ほかにも別子銅山事件など十九世紀末から二十世紀初頭にかけて公害被害の事件は多いが、それらの状況もまた隠され続けてきた。

この長い忘却の時間が、じつは二十世紀という時代を明確に示している。

なぜ、長い間顧みられなかったかといえば、理由は単純である。足尾銅山を考えてみよう。銅生産が国策にのっとっていたからである。銅山を経営した古河鉱業は、産銅業を基盤にしているが、やがて電線や銅線の製造を行うことで企業を巨大化していった。電線や銅線を思い浮かべれば、銅の生産量を高めることが日本の近代化に不可欠なことはすぐに理解できるはずである。だからといって鉱毒を周囲にまきちらし、また燃料の必要から山林を乱伐することは許されることではない。それが許されたのである。

川俣事件が起きた一九〇〇年は、明治政府にとり長年の宿願であった条約改正を果たした翌年で

もある。江戸幕府が開国を迫る列強諸国と締結した条約は外国人の治外法権を認め、輸入関税率を低く抑えられた不平等なものであった。外国人が日本でいかなる犯罪を行っても日本人にはそれを裁く権利すらなかった。この不平等条約を日本は清国に勝利することでようやく改正へとこぎつけた。ために政府は十九世紀末に国際法に基づく法令改正を次々に断行している。

ここまで整理すれば、日本は二十世紀のはじまりと共に、国際社会への仲間入りの体面と、国会開設をはじめとして国内の体制とを一応整えたことになる。しかし、その整備に余裕がなかったことは足尾銅山事件で明らかである。

横山源之助はすでに一八九九年（明治32）に『日本之下層社会』を著している。都市スラムの成立。ここにも二十世紀の群衆の新しい貌（かお）がある。しかも足尾鉱毒事件とは無縁ではなかった。殖産興業をスローガンに掲げる国策によって都市は貧民たちの集まる場所となり、膨張しはじめていたのである。

ただし横山は都市スラムの住民に同情するもののそこにかつての民権運動のような活気を認めることはしなかった。スラムに蠢（うごめ）くように棲む人々が群衆と化すには、一滴の怒りが落とされれば輪のように拡がることに彼はまだ気づいていなかった。

＊

十九世紀末から二十世紀はじめ、日本人の群衆の貌を別の角度から見たのはラフカディオ・ハーン（小泉八雲）である。

ハーンは一八九〇年（明治23）四月に来日し、一九〇四年（明治37）九月に五十五歳で没している。

この十四年のあいだに彼は日本各地で群衆に眼をとめている。

たとえば「停車場にて」(『心』所収)という散文がある。

一八九三年(明治26)六月、熊本の停車場に集まった群衆を描写する。四年前に熊本で巡査を殺して逃亡した凶悪犯が、福岡で別件で逮捕され、四年前の犯罪を自白したため護送されてくる。それを見ようと人々は駅前に参集する。犯人を連行した刑事は、群衆のなかから子どもを背負った女を認め、呼ぶ。女と子は殺された巡査の妻子である。

刑事は凶悪犯の前に子どもを立たせる。すると男は地面にひれ伏し、呻きはじめる。子どもはただ泣くばかりである。群衆は激昂することもなく、静まり、啜り泣きさえ洩れはじめる。

じつに美しい情景である。その美しさはハーンによれば、「その人々はすべてを了解し、すべてに感動し、罪人が悔悟し自らを恥じたことを良しとして、激昂や憤怒によってではなく、その罪の大いなる悲しみによって、自分たちもまた心が一杯になった」(平川祐弘訳)からである。

群衆が一かたまりの怒りにかられるのではなく、犯人の自省を一人一人が自分の心のうちに置いたからである。

しかし、じつはハーンは実際にこの光景を目撃したわけではない。近年の研究によれば、この話は新聞記事を素材にして創作したといわれている(太田雄三『ラフカディオ・ハーン――虚像と実像――』)。ただ、創作にすぎぬからといってハーンが描いた群衆を無意味とするわけにはいかない。むしろ注目したいのはハーンが、なぜ群衆の姿を浄化して描いたのか、ということだ。

このことを考える前に、ハーンが描いた十九世紀末の群衆をいましばらく追いかけてみる。以下は熊本第五高等中学校の教師の任期を終えた後に彼が出会った群衆である。

博覧会の入場料にも言及せねばなるまい。たった五銭なのである。そして、こんな低額でも収入は相当の額になると見込まれるほど入場者の数が多い。連日大勢のお百姓が京都の町に、それも巡礼の旅でもするようにほとんどが徒歩で、続々とやってくる。

これは一八九五年（明治28）四月から京都で催された第四回内国勧業博覧会の光景である。彼は四月中旬に三日間、博覧会を訪れている。

見物の大多数は農民だが、訪れる人々の反応を見たいと思って、私はしばらくその絵のそばに立っていた。彼らは目を見張り、軽蔑の笑いや蔑みの言葉をもらすと、掛け物の方へ行ってしまう。そちらの方が余程注目に値して、しかも十円から十五円しかしないのだ。

この描写は、博覧会で最も話題となった、黒田清輝の描いた裸婦像「朝妝」に対する観客の反応である。西洋婦人が裸のまま鏡の前で化粧する姿が油絵で描かれている。この作品を出展するか、否かで騒ぎとなり、出展された後も新聞はそれを難じている。

ハーンの見た観客の反応はここでもいささか割り引かねばならぬかもしれない。西洋画、しかも裸婦像を拒否し、日本画を受けいれる観客の反応を彼は、「芸術に表現されている人間の理想は、見る者の感情生活に納められた、『過去』の経験――無数の祖先から受け継いだ何か――に必ずや訴えるに違いない」としている。

ハーンは明らかに博覧会には感心していない。この眼は、同じ時期に京都で落成した巨大な、二つの建物を祝うために参集する群衆へ向けられるとがらりと変わる。一つの建築は、京都に桓武天皇が都を定めて以来、千百年を記念して造営された大極殿（現在の平安神宮）であり、いま一つは十七年かけて完成した東本願寺である。

ハーンは二つの巨大な日本建築を讃美し、しかもその落成式を待つ人々の姿に感嘆している。

落慶式を見るために十万人を越す農民が集まった。彼らが大勢で広大な中庭に敷きつめられた筵（むしろ）に座って待っているのを、私は午後三時頃に見たが、そこはまるで人の海であった。しかも、式の始まる午後七時まで、この大群衆は影一つない日なたで飲食物も口にせずひたすら待つのである。

ハーンは完成を祝う大群衆に「信仰心と忍耐力」を見ている。「国民の宗教的感情の印であるこれら二つの広壮な建築物が私に示唆するのは、国家がますます繁栄するのに伴って、その感情の倫理的な力と価値も将来増大するであろうということである」。これはどういうことか。いかに日本びいきのハーンとしても、巨大建造物の落成を黙々として待つ大群衆を眼のあたりにしたとしても、そこからすぐに「倫理的な力と価値」が「将来増大する」と考えるのは、いかにも短絡的でありすぎる。

ハーンは群衆が巨大建造物よりもその背後にある強大な力を見ていることに気づいている。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com